

発表者 まどか幼稚園 水上麻妃子

記録者 白藤幼稚園 長谷川 瞳

1 伝達講習の概要

(1) 幼稚園教育要領総則の改正の要点

- ① 幼稚園教育の基本
- ② 幼稚園教育において育みたい資質・能力及び「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」
- ③ 教育課程の役割と編成等
- ④ 指導計画の作成と幼児理解に基づいた評価
- ⑤ 特別な配慮を必要とする幼児への指導

(2) ねらい及び内容の改善・充実

(3) 教育課程に係る教育時間終了後等に行う教育活動等

(4) 体力向上マネジメント

- ① 体力の捉え方
- ② 幼児期における身体活動の現状
- ③ 幼児期における運動の意義
- ④ 幼児期の運動の在り方
- ⑤ 体力向上マネジメントの推進

2 研究発表の概要

(1) 分科会協議主題

幼稚園生活が幼児にとって安全なものとなるような環境の配慮や指導の工夫について

(2) 研究の視点

- ① 幼児が安全に生活するための環境の在り方を探る。
- ② 保護者や外部機関との連携の在り方を探る。

(3) 実践より明らかになったこと

- ・安全に関する約束やルールの伝え方、環境への配慮は、年齢に応じて工夫することが必要である。また指導の仕方について、園全体で話し合ったり他園の取組や意見を聞いたりしながら、よい方法を取り入れていくことが大切である。
- ・失敗した経験は、幼児自身が安全に関する意識を高め、その後の生活に生かすことにつながる。保育者は、幼児が失敗しないように先回りして声をかけたり援助したりするのではなく、寄り添い、見守り、共に過ごしつつ、幼児の発達に必要な体験と学びを意図的に取り入れることが必要である。
- ・園での避難訓練や外部機関での体験は、幼児の生活の中で生かされている。年齢や実態にあった体験的な学習を取り入れていくことで、幼児の安全に対する意識が高められる。

(4) 今後の課題

- ・年齢に合った安全に対する意識を高める活動や環境、自園に合った安全・防災意識を高める取組にはどのようなものがあるか研究していきたい。
- ・外部機関との連携の在り方にはどのような形があるか、他園等の情報を得ながら考えていきたい。

3 協議の概要

(1) 質疑応答

Q：飛行機を思うように飛ばせず、暗い表情をしていた子供たちのその後を教えてください。

A：遊戯室で思い切り体を動かして飛行機になりきって遊んだことで、子供たちの満たされない気持ちは少しずつ解消されていったように思う。

(2) グループ協議（発表についての質問や感想・自園での取組・テーマについての課題や悩み）

- ・外部機関での体験をぜひ取り入れてみたい。保護者も一緒に参加し体験を共有することで、家庭内においても安全への意識が高まり、さらに効果的である。
- ・園生活の中では、登降園の際に駐車場から玄関に入るまで、保護者が送迎することになっているが、事故やけがのないように、今後も安全指導に気を付けていきたいと改めて感じた。
- ・幼児が、園生活の中で危険だと思う箇所を、園内マップにシールを貼って表示したり、「ろうかはあろうか」などのポスターを描いて掲示したりしている事例が参考になった。
- ・危険な場所やヒヤリハットの事例等、職員全員に伝わらないことが多い。職員全員が共通理解できるように、伝達方法を具体的に考えていきたいと感じた。

4 指導助言事項 東部教育事務所 小林 仁美 指導主事

(1) 幼児が安全に生活するための環境の在り方

- ・幼児は普段から身近な大人の行動をよく見ている。園生活の中でも教師の安全に対する言動を自分のモデルにして、様々なことを学んでいる。
- ・幼児にとって「楽しさ」は大事なことである。しかし、時には安全面への配慮からその行動を制約されることもある。今回、飛行機を飛ばせなかった際、教師が遊戯室で飛行機になりきって遊ぶ機会をとったように、幼児の特性を受け止めながらも、自分の気持ちを調整する力を育てることが大切である。
- ・「一緒に考えようか」という教師の言葉かけが、言葉でやりとりをしながら問題を解決していく幼児の姿につながった。自分の気持ちを言葉に表して相手に伝えたり、相手の話を聞いたりする力を育むとともに、教師に認められたうれしさが主体的にルールをつくらうとする意欲を高めている。
- ・積み木を片付ける方法について、幼児の話合いから出てきた内容を、写真で表示したり、床に線を引いたりして視覚的に示したことが、この後どのようにすればよいか幼児の考えを生かし、共通理解する上で効果的であった。
- ・幼児の安全を守るために、物的、人的環境を日々見直すとともに、幼児に自らの安全を確保することのできる基礎的な資質・能力を育成すること大切である。このことは、生涯にわたって命を守ることにつながる。

(2) 保護者や外部機関との連携の在り方

- ・防災機関を利用して強風体験や地震体験等貴重な体験をすることは、災害等の恐ろしさについて実感を伴って幼児の記憶に残すことになる。体験をその後の指導や安全意識の向上に生かしていきたい。
- ・幼児が様々な体験をすることはとても大事である。保護者や外部機関、地域へ、園から情報を発信し、「みんなで守り育てる」意識をもつことが大切である。
- ・「この遊具を使うと、もしかしたらこんなことが起きるかもしれない」という「もしかしたら」をできるだけ多く想定する。報道等で知ることができた事故や過去の出来事、他者の経験を、自分自身にも起こりうることでありと認識したい。